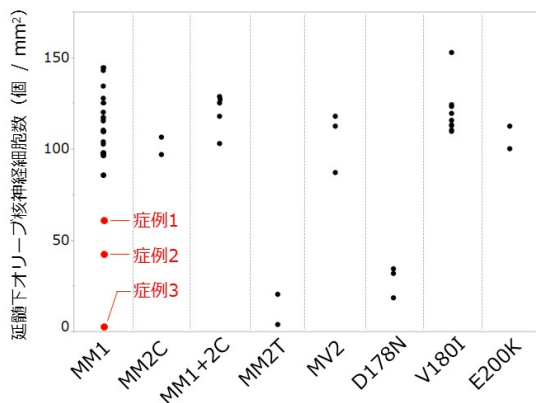


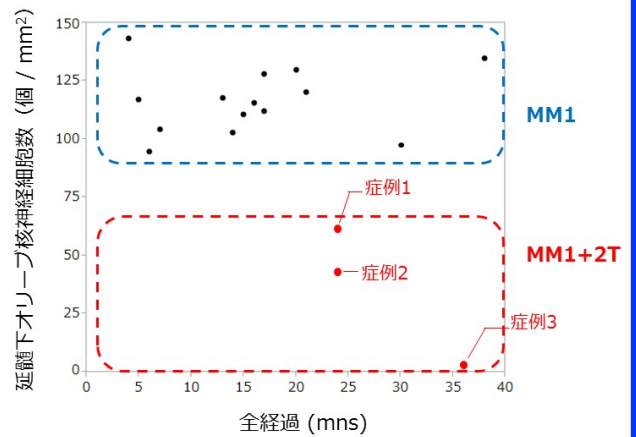
## 感染性に基づくクロイツフェルト・ヤコブ病の分類

研究開発分担者： 北海道大学大学院獣医学研究科比較病理学教室 小林篤史

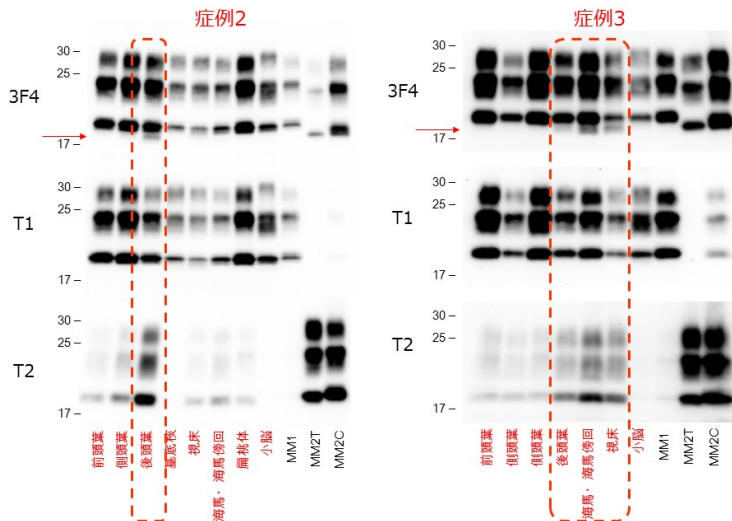
### 1 各CJDサブグループの延髄下オリブ核神経細胞数



### 3 全経過の長ささと延髄下オリブ核神経細胞数



### 2 患者脳に蓄積している異常型プリオン蛋白のタイピング



## 解説

1. MM1とMM2視床型プリオンが混在する症例 (MM1+2T) の発生頻度を調べた。検索した78例中、44例が孤発性CJDで、そのうち20例はMM1と診断されていた。その20例の中に、MM2視床型に特徴的な延髄下オリブ核の神経細胞脱落を示す症例を3例見つけた。
2. 3例のうち凍結脳組織が残っていた2例については異常型プリオン蛋白のウェスタンブロット解析をおこない、type 1異常型プリオン蛋白に加え、少量のtype 2異常型プリオン蛋白も混在することを確認した。
3. 同定したMM1+2T症例はいずれも臨床経過の長い症例であったが、MM1症例では経過が長くても延髄下オリブ核の神経細胞が脱落することはなかった。今後MM1+2T症例を同定する上で、延髄下オリブ核の神経細胞脱落は有用な指標となると考えられる。